

少子化の本当の理由： いい人がいない

安藏 伸治 明治大学政治経済学部 教授

1 未婚化, 晩婚化, 非婚化

全出生に占める非嫡出児の出生割合が 2%以下であるわが国では、少子化の主因は、15 歳から 49 歳の再生産期間に属する女性の婚姻率の低下、いわゆる「未婚化」と「晩婚化」であり、そして 50 歳までに一度も結婚しない生涯未婚者の増加を意味する「非婚化」の進展と考えられる。こうした傾向は 1980 年代以降にあらわれ、1990 年代になり顕著に現れ始めた。かつては皆婚社会と言われたわが国の結婚や家族形成の形が、過去 20 年間に大きく変化してきた現れである。女性だけではない、男性は更に未婚化、晩婚化、非婚化が著しい。

2 いい人がいない

理想的な結婚をするためには、男女双方がもつ様々な特質や両方の家族の特質が類似していること、つまり同質性が前提となる。同質性は結婚の安定をもたらし、異質性は相手に対する魅力となる。同質性やお互いの補完的な価値観の一致が見込まれない場合には、結婚後の適応的社会化が必要となる。それが不可能であるならば、結婚を選択せず、新しい相手を探す結婚相手選択のプロセスを継続する。その結果、未婚化や晩婚化、非婚化がわが国のように進行する。

わが国では結婚や男女の役割分担などに関する考え方や価値観において、未婚男女の間で相違が存在し、それは年齢が高くなればなるほど乖離を示す。男性は伝統的な妻として母としての役割を担ってくれる女性を求め、年齢が上昇すればするほどその傾向が強くなる。結婚についても伝統的な結婚観をもつ。それに対して、女性は伝統的な役割分担ではなく、夫との新しい時代の関係を求めている。30 歳代の女性は結婚についても非伝統的な考え方をしだいに強めていく傾向がある。

3 男女の価値観の乖離

こうした男女間の乖離は何故生まれてくるのであろうか。わが国の戦後の世帯構造は、父と母、そして子どもが二人という 4 人家族が標準とされてきた。母は専業主婦である割合が高く、成人子でも経済的に独立が可能であっても両親と同居し、父親の経済環境の下で生活が容認され、離家する必然性がない。未婚男性にとっても未婚女性にとっても、母親から居心地の良い家庭サービスを受けることができ、経済的には父親から援助を受けることができる理想的な環境なのである。男性は母親のような伝統的役割分担を行ってくれる女性をもとめ、さらに加齢し、経済的に社会的にも地位が高くなるにつれ、よりそうした考えを強くしていくのである。女性もまた、自分の両親が与えてくれるような経済環境と家庭サービスを提供し、あるいは協力して自分たちの家庭を築いてくれるような男性を求める。加齢し経済的に自立できるようになれば、より一層、理解ある男性を求めることになる。同質的な家族構造が、異質な未婚男性と未婚女性を生みだしたのではなかろうか。

4 さらに未婚化, 非婚化, 晩婚化

結婚における同質性と適応的社会化の両面から考察しても、わが国の独身男女が理想的な結婚相手にめぐり会う可能性は今後、さらに少なくなる。それ故、男女双方とも、結婚相手選択過程に重きを置き、未婚化、非婚化、晩婚化傾向は引き続き進展していく可能性が高いと言えよう。

更に重要なことに、女性のライフコースについての考え方に関しても男女で異なる。女性は結婚や出産でも仕事を辞めず、フルタイムの仕事を生涯続けるのを希望しているものが 3 割以上いるのに対し、男性は結婚や出産を機に一旦退職し、適当な時期にパートタイムの仕事につくといったライフコースを女性に求めているのである。人が生きていく上では、すべてが希望する通りには行かないのが現実である。ある面では妥協しつつ、それでも夢を求め、それに向かって努力し、理想に近づくように生きていくことが、人には求められるのであろう。